第8回

光送受信器(2)

2009年12月7日(月)

半導体レーザの動作原理



直接変調方式の電流・光出力の設定(1-1)



直接変調方式の電流・光出力の設定(1-2)



^{2009年度} _{光通信システム} 直接変調方式の電流・光出力の設定(2-1)



直接変調方式の電流・光出力の設定(2-2)



2009年度 光通信システム

発振遅延時間から導出した発振閾値電流・

キャリア寿命への要求

発振遅延時間

(ts:キャリア寿命)



例

 ● B=1Gbps伝送に対して100ps以下の発振遅延時間(Bの10%)を 得るためには、

Ith < 1.5mA @ τs=0.5ns

 B=2.5Gbps伝送に対して40ps以下の発振遅延時間(Bの10%)を 得るためには、

Ith < 0.64mA (*a*) τ s=0.5ns

2009年度 光通信システム

直接変調方式の制限

① 半導体レーザの本質的な変調帯域制限:緩和振動周波数 f_r

$$f_r = \frac{1}{2\pi} \sqrt{\frac{v_g}{eL} \frac{\Gamma_{MQW}}{wN_w L_w}} \eta_i \left(\frac{dg}{dn}\right) (1 - \varepsilon S) (I - I_{th})$$

10~20GHzが一般的

- ② 等価回路上の電気的(CR)帯域制限

 *f*_{3dB} < 20GHz

- ③ 時間的な波長変動(チャーピング)の影響

 αパラメータ: α = 3 ~ 7(伝送距離制限)

L:共振器長 w:活性層幅 Nw:QW数 Lw:QW厚 ηi:内部量子効率 Γw:光閉じ込め係数 dg/dn:微分利得係数 ε:利得飽和係数 I:バイアス電流 Ith:閾値電流

他の変調方式の必要性 (外部変調)

M. Suzuki, H. Hatakeyama, K. Fukatsu, T. Anan, K. Yashiki and M. Tsuji, Electron. Lett., vol.42, No.17, pp.975-976 (2006).



2009年度 光通信システム

直接変調方式の技術的課題 (送信器のチャーピング)



2009年度 光通信システム

光強度変調方式(2) <u>外部変調方式の構成</u>



2009年度 光通信システム

光変調器の動作原理(1)

(電界吸収型)

EA Modulator (EAM): 電界吸収型変調器





EAMによる符号化



光変調器の動作原理(2)

(電気光学結晶のマッハツェンダー型)



モード結合導波路(1)



式(5.1)を微分して式(5.2)を代入 $\frac{d^2 A}{dz^2} + j2\Delta \frac{dA}{dz} + \kappa^2 A = 0$ (5.3) $\kappa^2 = \kappa_{12} \times \kappa_{21}^*$ $2\Delta = \beta_2 - \beta_1$

結合導波路の結合係数

式(5.1)の_{K12}は対称構造において以下の式で表される。

$$\kappa_{12} = \frac{\kappa_0^2}{\beta_0} \frac{1}{\gamma a} \frac{\exp(-\gamma d)}{1 + (\frac{\kappa_0}{\gamma})^2}$$

たたじ
$$\kappa_0 = \sqrt{k_0^2 n_1^2 - \beta_0^2}$$

 $\gamma = \sqrt{\beta_0^2 - k_0^2 n_2^2}$
 $k_0 = \frac{2\pi}{\lambda_0}$

n1:コアの屈折率 n2:クラッドの屈折率 a:コア幅の1/2 d: 2つのコアの間隔 λ0: 真空中の波長



モード結合導波路(2)

qを未知数とし、

$$A(z) = [a_1 e^{jqz} + a_2 e^{-jqz}] \exp(-j\Delta z) \quad (5.4)$$
$$B(z) = [b_1 e^{jqz} + b_2 e^{-jqz}] \exp(j\Delta z) \quad (5.5)$$

式(5.4), (5.5)を式(5.1)、(5.2)に代入し、
$$a_1 + a_2 = A(0)$$
 (5.6)
 $b_1 + b_2 = B(0)$ (5.7)

を満足する定数 a_1, a_2, b_1, b_2 を求めると、以下の一般解を得る。 $A(z) = \{ [\cos(qz) + j\frac{\Delta}{q}\sin(qz)]A(0) - j\frac{\kappa}{q}\sin(qz)B(0) \} \exp(-j\Delta z)$ (5.8) $B(z) = \{ -j\frac{\kappa}{q}\sin(qz)A(0) + [\cos(qz) - j\frac{\Delta}{q}\sin(qz)]B(0) \} \exp(j\Delta z)$ (5.9) ただし、 $q = \sqrt{\kappa^2 + \Delta^2}$

モード結合導波路(3)

片方の導波路のみに光が入射された場合、A(0)=A₀, B(0)=0なので





モード結合導波路(4)

2本の導波路が同一構造の場合($\beta_1 = \beta_2$ または $\Delta = 0$)、式(5.8), (5.9)は以下のようになる。

$$\begin{cases} A(z) = A(\mathbf{0})\cos(\kappa z) - jB(\mathbf{0})\sin(\kappa z) & (5.12) \\ B(z) = -jA(\mathbf{0})\sin(\kappa z) + B(\mathbf{0})\cos(\kappa z) & (5.13) \end{cases}$$

マッハツェンダー型導波路の解析(1)



上側と下側の導波路が同じ構造(等位相)であるとすると、△=0

マッハツェンダー型導波路の解析(2)

式(5.16)、(5.17)を式(5.12)、(5.13)のA(0)、B(0)に代入

$$\begin{cases}
A_3 = -jA_0 \sin(\frac{\phi}{2\phi}) \exp(-j\beta L + j\frac{\phi}{2\phi}) & (5.18) \\
B_3 = -jA_0 \cos(\frac{\phi}{2}) \exp(-j\beta L + j\frac{\phi}{2}) & (5.19)
\end{cases}$$

$$\sum \left\{ \begin{array}{l} |A_3|^2 = |A_0|^2 \sin^2(\frac{\phi}{2}) & (5.20) \\ |B_3|^2 = |A_0|^2 \cos^2(\frac{\phi}{2}) & (5.21) \end{array} \right.$$

$$\phi=0$$
のとき、 $|A_3|^2 = 0, |B_3|^2 = 1$
 $\phi=\pi$ のとき、 $|A_3|^2 = 1, |B_3|^2 = 0$

2009年度

光通信システム

$$\phi = \frac{\pi}{2} + \delta \phi$$
 となるようにバイアスを加えると、
 $|A_3|^2 \simeq \frac{1}{2} |A_0|^2 (1 + \delta \phi)$ (5.22) 〇〇 強度変化が得られる

2009年度

2009年後 光通信システム マッハツェンダー型干渉計の強度変調器の動作を再度



^{2009年度} _{光通信システム} マッハツェンダー型導波路用デバイス(電気光学結晶)





2009年度 光通信システム

実際の送信器構成の一例



いろいろな光強度変調方式

伝送方式	NRZ	RZ	CS-RZ	SSB-RZ
データ パターン	011010 位相は一定	011010 01101 01101 01101 0110 010 000	011010 070707	
スペクトル	f₀/2		f ₀ /2	
光SN比耐力	\bigtriangleup		\bigcirc	
SPM-GVD 耐力	\bigtriangleup	\bigcirc	\bigcirc	
光スペクトル 重なり	\bigcirc	\bigtriangleup	\bigcirc	
変調の構成	IM/PM	$ \begin{array}{c c} IM & IM \\ \hline & & & \\ \hline f_0 & NRZ & f_0 \end{array} $	$IM PM$ $f_0 NRZ f_0/2$	$ \begin{array}{c c} IM & PM \\ \hline & & & \\ \hline & & & \\ \hline & f_0 & NRZ & f_0 \end{array} $

NRZとRZ方式



研究用など。

繰り返し周期を持つパルス波形の帯域



このパルス列をフーリエ級数展開すると、

NRZ変調の信号帯域

10Gbps, 2³¹-1 PRBS (Pseudo Random Bit Sequence), マーク率1/2





RZ変調の信号帯域



最高周波数

 $10Gbps \div 1 = 10GHz$





各変調方式の光パルス生成手法(1)

1台のマッハツェンダー型光変調器での生成方法



マッハツェンダー型光変調器における電界の入出力の関係

$$\begin{cases} E_{out} = jE_{in} \exp(-j\beta L) \sin(\frac{\phi_1 - \phi_2}{2}) \exp(j\frac{\phi_1 + \phi_2}{2}) \\ \phi_1 = \frac{\pi}{2} \frac{V_1}{V_{\pi}} [\sin(\omega t + \Psi)] + V_{bias1} \\ \phi_2 = \frac{\pi}{2} \frac{V_2}{V_{\pi}} \sin(\omega t) + V_{bias2} \end{cases}$$
(5.23)

各変調方式の光パルス生成手法(2)

変調方式	CS-RZ	RZ	SSB-RZ	Duobinary
駆動条件	$V_{1}=V_{2}=V_{\pi}$ $\Psi=\pi$ $V_{\text{bias1}}=V_{\text{bias2}}=0$ $\omega=\omega_{1}=2\pi f_{0}/2$	$V_{1}=V_{2}=V_{\pi}/2$ $\Psi=\pi$ $V_{\text{bias1}}=\pi/2$ $V_{\text{bias2}}=0$ $\omega=\omega_{0}=2\pi f_{0}$	$V_{1}=V_{2}=V_{\pi}/\sqrt{2}$ $\Psi=\pi/2$ $V_{bias1}=\pi/2$ $V_{bias2}=0$ $\omega=\omega_{0}=2\pi f_{0}$	$V_{1}=V_{2}=V_{\pi}$ $\Psi=\pi$ $V_{\text{bias1}}=V_{\text{bias2}}=\pi$ $\omega=\omega_{0}=2\pi f_{0}/2$
位相状態	・位相項一定 ・f ₀ /2周波数で 交互に位相反転	・位相項一定 ・f₀周波数の 光パルス	・f₀周波数の光 パルスにビット 同期して位相変調	・位相項一定 ・f ₀ /2周波数で 交互に位相 反転

RZ方式



CS-RZ方式



2009年度 SSB-RZ方式 光通信システム 1 フーリエ変換スペクトル Essbrzp(1,t)0 20 -1 _ 2 $(| \text{Essbrzf}(f) |)^2 = 10$ 5 t 2 強度 0 -2 - 1 0 2 f $(| Essbrz(1,t) |)^2$ ・時間周波数 f_0 (図中では1に相当) ・各パルスに同期して位相変調 0 片側側波帯が抑圧 2

5 2 3

4

4


M系列(Maximal-length linear shift register sequences, M-sequences)とは?

- 🥚 擬似ランダム符号(Pseudo random code, PN code)の一種
- 符号長mのM系列の周期:2^m 1



1ビットずつずらして見た7ビットの符号がすべて異なる(all 0以外すべてを 含み、各符号は1回のみ出現)

NRZ符号(符号長7のM系列)(1)

計算の参考:『Mathcadによる光システムの基礎』小関健,原田一成共著,森北出版





NRZ符号(符号長7のM系列)(2)



2009年度 光通信システム

NRZ符号(符号長7のM系列)(3)



フーリエ変換(周波数軸)



2009年度 光通信システム



RZ符号(符号長7のM系列)(2)



IM: Intensity Modulator (強度変調器)

2009年度 光通信システム

RZ符号(符号長7のM系列)(2)

フーリエ変換(波長軸)



フーリエ変換(周波数軸)



デュオバイナリ符号(符号長7のM系列)(1)



デュオバイナリ符号(符号長7のM系列)(2)

送信器構成

LiNbO3



IM: Intensity Modulator(強度変調器)

デュオバイナリ符号(符号長7のM系列)(2)

フーリエ変換(波長軸)

フーリエ変換(周波数軸)







- ① 電気光学結晶(LiNbO₃)の場合
 印加電界による屈折率変動がチャーピングの原因
 → 影響小
- 2 半導体(EA変調器)の場合

光励起キャリアによる屈折率変動がチャーピングの原因

→ LiNbO₃より影響大

バイアス電圧を選ぶとブルーチャープ領域があり、パルス圧縮の効果 が期待できる。

コヒーレント検波の動向

20~15年前の研究のモーティベーション

① ショット雑音限界に近い高感度の最小受信感度の実現が 可能(IM-DD方式より25dB程度の受信感度改善が可能)。

② 良好な特性の受信器の少ない波長1.3, 1.55µm帯における 受信感度の向上が期待できる。

15年前の暗転

EDFA(光ファイバ増幅器)の登場により吸収による伝送距離制限が 飛躍的に改善され、受信にかかわる技術的課題をかかえても受信感度 改善効果を期待してコヒーレント方式を推し進める動機が薄れた。

2~3年前からの復興

EDFAを用いたDWDM方式の残留分散・非線形効果の影響など 技術的困難さを克服するため、コヒーレント方式の受信感度改善効果 が見直された。DPSKは受信器構成など技術的敷居が低かったので採用。

コヒーレント検波の変調方式



受信系の基本構成(1)





受信系の基本構成(2)



^{2009年度} 光通信システム ASK(振幅変調)の変調信号(1) ベースバンド信号 振幅変調波



変調波の一般表現

 $s(t) = A(t)\cos[2\pi f_c t + \phi(t)]$

振幅変調ではA(t) ∝ g(t) (g(t) : 変調信号), φ(t)=0なので、 振幅変調波は以下に書き換えられる。

 $S_{AM}(t) = g(t)\cos(2\pi f_c t)$



ASK(振幅変調)の変調信号(2)

フーリエ変換して、

$$S_{AM}(f) = \int_{-\infty}^{\infty} g(t) \cos(2\pi fct) e^{-j2\pi ft}$$

 $= \frac{1}{2} \int_{-\infty}^{\infty} g(t) \exp\{-2\pi (f - f_c)t\} dt + \frac{1}{2} \int_{-\infty}^{\infty} g(t) \exp\{-2\pi (f + f_c)t\} dt$
 $= \frac{1}{2} G(f - f_c) + \frac{1}{2} G(f + f_c)$
 \Rightarrow is(t)のフーリエ変換スペクトルはG(f)を±f_cへ周波数変換
 \rightarrow 両側帯波搬送波抑圧(Double Sideband Suppressed Carrier
: DSB-SC)変調
· 変調度が1よりも小さいAM変調では搬送波成分が生じ、
送信電力効率が低下(g(t)を1+g(t)に置き換えて計算)

2009年度 光通信システム

PSK方式の種類



2009年度

光通信システム

PSK(位相変調)の変調信号(1)

変調波の一般表現

 $s(t) = A(t)\cos[2\pi f_c t + \phi(t)]$

位相変調ではA(t):一定, φ(t) ∝ g(t) (g(t):変調信号)なので、 位相変調波は以下に書き換えられる。

$S_{PSK}(t) = \cos[2\pi f_c t + g(t)]$

PSKでは送信する位相情報の不確定性を除去するため、以下の条件を課す。 $|g(t)| \le \pi(rad)$

 $S_{PSK}(t) = \cos[g(t)]\cos(2\pi f_c t) - \sin[g(t)]\sin(2\pi f_c t)$

互いに位相がπ/2異なる搬送波を、位相偏移量の正弦・余弦で変調し、 それらを合成したもの。

(例①) BPSKの場合 g(t)=0またはπ

$$\sum S_{PSK}(t) = m(t)\cos(2\pi f_c t), m(t) = \pm 1$$

両極性矩形パルスでDSB-SC変調

(例②) QPSKの場合: 2つの直交したBPSKを線形加算 $S_{QPSK}(t) = m_1(t)\cos(2\pi f_c t) - m_2(t)\sin(2\pi f_c t)$ $= \cos[2\pi f_c t + \tan^{-1}\frac{m_2(t)}{m_1(t)}]$ $m_1(t), m_2(t) = \pm 1$

PSK方式

式(5.23)において、 $V_1 = V_2 = V_{\pi}$, $\psi = 0$, $V_{bias1} = \pi$, $V_{bias2} = 0$ とおくと、 $E_{out} = -E_{in} \exp(-j\beta L) \exp(j\frac{\pi}{2}\sin\omega t)$



2009年度 光通信システム

PSK符号(符号長7のM系列)



DPSK変調

DPSK(Differential Phase-Shift-Keying, 差動位相シフトキーイング方式) PSK変調の1種でデータ1を隣接ビット間の位相差π、データ0を 隣接ビット間の位相差0に割り当てたもの。

40Gbps DWDMの長距離・受信感度改善(3dB)を目的にこの2~3年
 急激に取り組みが盛んになってきた。



DPSK送信器



DPSK受信器





DQPSK送信器



DQPSK送信ブロック

$$b_{1} \longrightarrow d_{1} \qquad \varphi_{I}(t) = \sqrt{\frac{E}{T}} \cos(2\pi f_{c}t)$$

$$\phi_{Q}(t) = -\sqrt{\frac{E}{T}} \sin(2\pi f_{c}t)$$

$$s(t) = \begin{cases} \sqrt{\frac{E}{T}} \cos[2\pi f_{c}t + \phi] & (0 \le t \le T) \\ 0 & (elsewhere) \end{cases}$$

$$s(t) = \sqrt{\frac{E}{T}} \cos[2\pi f_{c}t + \phi] = \sqrt{\frac{E}{T}} \cos\phi \cos 2\pi f_{c}t - \sin\phi \sin 2\pi f_{c}t$$

$$\frac{1}{10} \frac{1}{10} \frac{1}{$$

DQPSK受信器



DQPSKによる狭帯域化の効果



WDM用光送信器



光送信器の紹介例

10Gbps SONET/SDH用光送受信器 OpNext, TRV5001/11/21BN

多波長DFB-LD/EA変調器

K. Kudo, M. Ishizaki, T. Sasaki, H. Yamazaki and M. Yamaguchi (NEC), IEEE Photon. Technol. Lett., vol.10, pp.929-931 (1998).

波長選択光源

H. Hatakeyama, K. Kudo, Y. Yokoyama, K. Naniwae, and T. Sasaki, IEEE J. Selected Topics in Quantum Electron., vol.8, No.6, pp.1341-1348 (2002).





光アクセス系用光送信器

2009年度 光通信システム アクセス系NW用光デバイスへの要求条件





(1) 低コスト実現のための実装負担の軽減技術が主体

- LD/PDと光ファイバの調心トレランスを拡大するための スポットサイズ変換器
- パッシブ・アライメント技術
- 温調無しで-40°C~+85°C動作が可能な耐環境材料の使用
2009年度 光通信システム



2009年度 光通信システム スポットサイズ変換器付半導体レーザ

H. Oohashi, M. Fukuda, Y. Kondo, M. Wada, Y. Tohmori, Y. Sakai, H. Toba and Y. Itaya (NTT), J. Lightwave Technol., Vol.16, No.7, pp.1302-1307 (1998).